

ICM 2018 Japan Forum によせて

駐ブラジル日本国大使
山田 彰

本年 8 月にブラジルのリオデジャネイロで国際数学会議 (ICM2018) が開催されました。私はお招きを受けて、ブラジリアからリオに出張し、8 月 8 日夜、日本代表団が主催するジャパン・フォーラムに出席しました。

国際数学会議は、数学界最大のイベントと承知しています。今年の会議は主催者である国際数学連合の総裁を日本の森重文教授が務めていることもあり、日本の存在感が大きかったような気がしました。ジャパン・フォーラムにも世界各国の多くの数学者が集いました。

ブラジルは、中南米随一の大国で、国際社会における存在感は日本人が考えるより大きなものがあります。一方で、国内の所得格差、社会格差は大きく、教育が国民に対して、平等に、幅広くいきわたっていないことがその理由の一つです。たとえば、ブラジルの自然科学の分野では、優秀な人材はかなりいるのですが、国民の中の各階層のギャップが大きく、自然科学の教育が国民全体に十分行われていません。

そして、数学の分野でも同様のことが起きているのではないかと私は感じています。ブラジルは、2014 年にラテンアメリカ人として初となるフィールズ賞を受賞した Artur Avila 氏を輩出し、近年国際数学オリンピックでも多くのメダリストを生んでいます。一方で、国際学力調査 (Pisa) においては、数学基礎教育に関し 70 ヶ国中 65 位にランキングされ、15 歳から 16 歳の 70% が数学の基礎レベルに達していないとブラジル基礎・応用数学研究所 (IMPA) は評価しています。

ブラジルの数学者たちも当然こうした状況を改善しようと考えているわけであり、リオの国際数学会議においても青少年の関心を引き付ける様々な試みが行われていたようです。

国際数学会議がブラジルの発展に資することを祈りつつ行った、ジャパン・フォーラムでの私のスピーチを以下にご紹介します。

『こんばんは。駐ブラジル日本国大使の山田彰です。

御出席の皆様、ブラジルによろこそ。

国際数学会議 (ICM2018) のジャパン・フォーラムにお招きいただき、あり

がとうございます。

最初に、フィールズ賞、ネヴァンリンナ賞、ガウス賞、チャーン賞の受賞者の方々に祝い申し上げます。日本の柏原教授、チャーン賞受賞、おめでとうございます。

2018年は日ブラジル関係にとって特別な年であり、この年に美しいリオデジャネイロで国際数学会議が開催されることを喜ばしく思います。2018年は、ブラジル日本人移住110周年という記念すべき年であり、7月には眞子内親王殿下がブラジルを訪問し、5州14都市を訪れ、日系社会の皆さんと移住110周年を祝いました。日本とブラジルにとってこの110年は、科学技術、農業、医療、環境、宇宙と海洋など様々な分野にわたる両国の協力の歴史でもあります。

2018年はブラジルの数学界にとっても特別な年でした。今年1月、ブラジルは国際数学連合(IMU)によってグループ5に認定されました。1954年にブラジルがIMUに加盟した時はグループ1で、それ以来ブラジルは徐々にランキングを上げてきましたが、これはブラジルの数学界の努力の賜物です。私は、ブラジルにおいて数学の発展のために尽力されてきたブラジル数学者の皆様に敬意を表します。

さて、4年前にソウルでICMが開催されたときに、日本の別所駐韓国大使がジャパン・フォーラムでスピーチし、『自分は学生時代数学が不得意だったので、著名な数学者の前でスピーチをする日が来るとは夢にも思わなかった。』と言ったそうです。別所大使は私の高校の先輩なのですが、先輩のコメントを繰り返すのは避けたいと思います。

数学は、私にとって高校時代最も興味を持っていた科目の一つでした。数学が得意だったというわけではありませんが、身に着けた数学的思考は今でも役立っていると感じます。

私は、「数学は、すべての自然科学と技術発展のまさに基礎である。」と考えています。今日、ブラジルをはじめ中南米諸国は国民レベルで科学技術を発展させる必要があります。エリート科学者だけではなく、一般国民に至るまで、科学技術の発展のための数学の重要性を理解することが重要だと思います。

駐ブラジル日本大使として、ブラジルでのICMとブラジルにおける数学の発展が、ブラジルの経済社会の発展に貢献するように願っています。

最後に、ICM2018の参加者の皆様が、今日のジャパン・フォーラム及び残りの会議の間に、実り多い議論をされるように希望します。皆様の数学についての議論は私の理解を超えるでしょうが、美しいリオの夜をお楽しみください。ありがとうございました。』